

厚生科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）

分担研究報告書

男性不妊治療のあり方に関する研究

研究協力者 太田 昌一郎 富山医科薬科大学附属病院泌尿器科助手

研究要旨

1997年の富山医科薬科大学泌尿器科における男性不妊症診療の実態を調査した。当科では紹介患者よりも直接来院の割合が高かった。また、原因疾患としては精索静脈瘤が最も多く、これの新しい診断治療の研究に今後も取り組み、患者のニーズに対応していく方針である。

A. 研究目的

生殖補助医療の技術の発展とともに、不妊治療は近年顕著な進歩を遂げた。しかしながら男性に原因があると考えられる不妊症の実態は明らかではなく、どのような患者に対してどのような適応で治療が行われているか、また、その治療効果については全国的な調査等は未だに行われたことがない。不妊治療は昨今の社会的問題として重要な課題となってきた。男性不妊の実態および治療等に関する研究では、わが国における男性不妊症の実数、病因、治療内容、妊娠率を調査する。また最近の男性不妊症に対する生殖補助技術の現状も調査し、これらの調査研究により、適正な生殖補助技術の男性不妊夫婦に対する適応について検討する。

B. 研究方法

男性不妊症の当院における診療の実態を調査したうえで男性不妊症の病因、検査、治療法について研究班で検討のうえ用意した項目を集計した。

C. 研究結果

まず、当院における診療の実態であるが1997年に当科を受診した男性不妊症新患者数は56名であり、これは全患者数の6.4%、男性新患者数の9.4%であった。これらの男性不妊患者のうち、24例は直接来院した症例で次いで他院の婦人科からの紹介が17例、他院の泌尿器科からの紹介が8例、そして当院の婦人科からの紹介が7例であった。

次に、当院における男性不妊症の病因、検査、治療法の検討結果であるが、まず、病因である。不妊の原因は大半が精巣因子であり、そのうち、特発性が27例ともっとも多数を占めた。次いで、精索静脈瘤が26例であった。低ゴナドトロピン性の乏精子症も1例認められた。あと、性機能因子として射精障害が2例認められ、これらはいずれも糖尿病に合併したものであった。なお、今年には精路因子が原因であると考えられる症例は認められなかった。検査は当科においては、男性不妊患者に対して、一般精液検査のほかには内分泌検査、精子機能検査およびCellSoft3000を用いた精子運動能検査などを施行しているが今回は精子凝集反応を含む一般精液検査結果のみ検

討した。結果はWHOの基準で判定した。精液検査は56例中52例に施行した。精液量が正常(2.0ml以上)であったものは31例、精子数が正常(2000万/ml以上)であったものは29例、また、無精子症は9例に認められた。精子運動率が正常(50%以上)であったものは19例で精子正常形態が正常(30%以上)であったものは27例であった。最後に治療であるが、精巣因子の例については治療は薬物と手術に大別され、薬物療法では漢方の補中益気湯を処方した例が10例であった。手術方法では精索静脈瘤に対して、当科では腹腔鏡下の内精静脈高位結紮術を施行しており、15例に施行した。射精障害の2例についてはトフラニールを投与し、そのうち1例では膀胱内精子の回収を施行した。

D. 考察

当科では1979年の開院以来、男性不妊症の専門外来を開設し、患者の治療にあたってきた。その間地域住民に浸透したためか、直接来院の割合がもっとも高かった。今後は当院産婦人科との連携をさらに強めて、患者のニーズに答えていきたい。

原因としてもっとも割合の高かったものは精索静脈瘤であるが、当科ではこの診断にカラードプラを応用している。触診所見よりもカラードプラでの内精静脈の逆流速度の方が予後をよく反映することが判明している。今後は治療面にも最新の技術を応用していきたい。

E. 結論

1997年の富山医科薬科大学泌尿器科におけるものを集計した。男性不妊症診療の実態を調査したので報告した。